

序に代えて

山口権三郎、山田又七 は、それぞれ老境に入ってから、一年、半年に及ぶ長期の海外視察旅行を行ない、帰国後の数年で、それぞれ実業学校を創立したり、油田採掘の機械保守のための鉄工所を設立したり、驚くほど似た人生を歩みました。最初、日本語版の文書を作成していた時には気づきませんでした。英文版の作成途中に、ようやく、このことに気付きました。

とりあえず、英文版の該当部分を転記し、今後、企業家精神、教育への想い、設立した鉄工所の歴史、特に新潟鉄工（正式名称: (株)新潟鐵工所)について、まとめていきます。（講義用文書を先行します。）

参考 関連する事業家の生誕年

1. 山口権三郎 の生涯

山口権三郎 講演会資料より（平成29年_2017_11月）

包括的にまとめられた報告であり、使わせていただく。

2. 山口権三郎、山田又七 教育関係、鐵工所設立トピックス

(1) 山口権三郎の教育関係トピックス

(2) 山田又七の教育関係トピックス

補足 参考までに、新津油田の中野貫一 の教育支援について

(3) 山口権三郎の新ビジネスへの想い（石油事業）

(4) 新潟鐵工所の設立趣意書

3. 山田又七 の生涯 ～Web、長岡市史などを参考にした。

4. 山田又七 補足

(1) 山田又七、田村文四郎と令終会

・田村 文吉 補足

(2) 山田又七小伝メモ

(3) MySkip 2015年2月 Vol169 山田又七像

5. 新津油田の中野貫一

6. 新潟の明治期の産油量について

補足 日本の近年の産業盛衰グラフ

英文版からの転記

3. Foundings of businesses and their falls
Time table regarding Yamaguchi Gonzaburou and Yamada Matashichi
4. Yamaguchi Gonzaburou and Yamada Matashichi
5. A group of industries remaining, survived the bankruptcy of heavy machinery company (Niigata Engineering)
 - (1) Brief history
 - (2) Successor companies

参考 関連する事業家の生誕年

山口権三郎 1838(天保9) 誕生
 山田又七 1855(安政2)
 内藤久寛 1859(安政6)
 久須美秀三郎 1850(嘉永3)
 大竹貫一 1860(安政7)
 三島億二郎 1825(文政8)
 岸宇吉 1839(天保10)
 目黒十郎 1813(文化10)
 新渡戸稲造 1862(文久2)
 渋沢栄一 1840(天保11)
 田村文四郎 1854(安政元)
 田村 文吉 1886年(明治19)

1. 山口権三郎 の生涯

「山口権三郎と明治の長岡」

小国商工物産館 平成29年11月12日(日) 午前10時～11時

講師 小国文化フォーラム事務局長 高橋実さん(小国ガイドの会 会長)

1. 山口家

柿崎区山口村の郷士 慶長3年上杉家会津移封に取り残される。

八石山の麓刈羽郡旧小国町横沢村金沢に移り住む。山口郷きっての豪農、大地主。

横沢は、文政6年(1825)より明治になるまで上山藩越後分藩だった。

父の平三郎が金貸し業で財を築く。

2、山口権三郎の家系

山口喜代太 田中利加子

山口平三郎 松木とせ子

山口権三郎、野本恭八郎、大塚益郎、田口十一郎、山口政治の兄弟

山口政治が山口家を継ぐ

山口権三郎

達太郎 西脇喜志子

誠太郎

順太郎

敬太郎(現理事長)

3. 年譜

1838(天保9) 誕生

4. 権三郎の係累

ちよ子 新町 珍相寺出身 安政元年、権三郎17歳で結婚する。

恭八郎 権三郎の弟、長岡野本家へ養子 互尊文庫の創立者

大塚益郎 権三郎の二番目の弟、小千谷市片貝に養子 県会議員

田口十一郎 権三郎の三番目の弟、旧三島町田口家へ養子 県会議員

山口政治 権三郎の末弟 山口家を引き継ぐ 新潟鉄工重役

達太郎 権三郎の息子 父の事業を引き継ぐ 初代新潟織工所会長 衆議院議員

5、少年時代

嘉永2(1849)12歳 片貝の丸山貝陵塾に学ぶ

嘉永4(1851)14歳 上山藩庄屋役となる 藍沢南城塾に学ぶ
小国出身の相沢朴斎が塾頭になるのは1860-1872

6. 県会議議長

明治12(1879)42歳 第一回県会議員当選、改進黨。
改進黨に当時は内藤久寛(旧西山町有地の旧家)、阪口仁一郎、樋口元周、
久須美秀三郎、本間新作(拇新津市の豪農、第四銀行設立に加わる)ら。

明治19(1886)49歳 山口家兄弟四人県強食に議席を占める。
明治21(1888)51歳 県議会辞職
明治23(1890)53歳 改進黨から第1回衆議院議員に立候補して落選。政界から身を引く。

7. 日本石油会社設立

明治19年(1886) 49歳 内藤久寛、山口家を訪ね、石油会社設立の相談を受ける。
明治21(年(1888) 51歳1月 殖産協会第1回会合、石油会社設立を説く。会社経営を内藤
久寛に委託、資本金15万円。2月県議会にて石油会社の県の許可下る。
明治28年(1895)58歳 石油関連機械製造を目途に新潟鉄工所設立。
大正10年(1921) 日本石油、宝田石油と対等合併。
昭和21年(1946)内藤久寛没 85歳。

8. 欧米視察旅行

明治22年(1889)4月アメリカの石油事情視察の為欧米視察旅行に出発。アメリカでは、
福沢諭吉の女婿桃介の案内。6月ヨーロッパへ向かう。1ヶ月後フランスへ、パリ万国博
見学。ドイツへ、新渡戸稲造の案内。ロシア、ポーランド、スイス、イタリアを回る。
ボンベイ・シンガポール・上海をまわり、明治23年(1890)3月2日 欧米旅行を終えて長崎へ帰国。

／

9. 銀行創設

明治6年(1873)36歳 第四国立銀行創立に参画する
明治12年(1879)42歳 六十九銀行内に銀行類似会社長岡商会設立し、西脇吉郎右衛門、
山田権左衛門らと名を連ねる。
明治18年(1885)48歳 第四国立銀行取締役
明治19年(1886)49歳 高田第百三十九銀行取締役
明治29年(1896)59歳 長岡銀行 資本金50万円で設立
大正7年 長岡銀行が県内銀行中、六十九銀行につき第二位となる。
昭和17年(1942) 六十九銀行と円満が合併。

10 経済活動

明治13年 誠之社を 六十九銀行内に結成。 都市部の商工業者中心の経済団体。
山口権三郎中心に小千谷西脇国三郎、近藤九満治(堀金村)、野本恭八郎、岸宇吉、
目黒十郎、松田周平が中心で他に48名が名を連ねる。

輸入超過で正価が流出している。 物産を興し、鉱山を開き、運輸の便をよくし、
商権を掌握するにあたり、資金部・農事改良、北海道改作。鉄道部・鉱山開掘部を
設けて活動を計画したが、進まずに止む。

12. 鉄道事業

明治14年(18細 44歳 岸宇吉(長岡の果報商、貿易商、第六十九銀行重役)らと鉄道
資本会社発起人となったが、県の許可下りず。

明治17年(1884) 47歳 県議会に鉄道敷設案を提出するが、許可下りず。

明治23年(1890) 53歳) 県議会に北越鉄道施設費発案 県肉連過ルート3に分かれ、否決。

明治24年(1891) 北越鉄道期成同盟会開催、直江津まで来ていた鉄道の新潟まで延長
することを期す。

明治27年(1894)) 57歳 北越鉄道直江津・三条間閉通

明治31年(1898) 61歳 北越鉄道新潟・直江津間開通。

明治37年(1904) 67歳 新潟・東京間鉄道で結ばれる。

明治39年(1906) 鉄道国有法による鉄道国有化買収され、国有鉄道に帰す。

15、教育の大切さ

明治5年(1872) 35歳 私立金沢小学校設立。翌年第十八番小学校として開校。

明治25年(1892) 55歳 新渡戸稲造の協力で長岡阪之上に実業学校設立。

31年で閉校となる。

明治31年(1898) 61歳 成績優秀で学費困窮生徒の学費を貸す育英事業開始する

2. 山口権三郎、山田又七 教育関係トピックス

(1) 山口権三郎の教育関係トピックス

小国山口家と長岡実業学校創設、さらに工学高等教育研究機関の誘致へ

以下、山口育英奨学会 資料より

山口家は代々社会公益事業の助成に意を注ぎ、教育関係については特に熱心であり、当主(山口敬太郎氏)の高祖父に当たる山口権三郎翁は、明治5年の学制に基づき居村の横沢村に独力をもって学校を設立し、のちにその設備一式に多額の資金を添えて村に寄付し、村内の子弟の教育に力を尽くしました。

明治25年、青年たちに実業の知識・技術を学ばせようと長岡に実業学校を創設しました。しかし当時はまだ入学希望者が少なく明治31年に閉鎖するに至りましたが、素志を貫徹するため長年にわたり理・工・農の大学や専門学校の学生に学資を貸与して学業を成就させ、多大の成果を収めました。

権三郎翁の長男である山口達太郎翁は亡父の遺志を継ぎ、より広範囲に人材を募集して育英事業を拡充させるため、大正4年に多額の基金を寄付して基金を設立し、その運営を新潟県に委ねて学資を学生に貸与しました。

山口達太郎翁の長男である、山口誠太郎翁もその遺志に従って数回にわたり基金を増額し、新潟県ではこれを山口奨学資金と称して引き続き事業を遂行してきました。しかし第二次世界大戦後の経済変動のため、活動を中止の止むなきにいたり、その基金は現在県有財産として保管されております。

誠太郎翁はこれを非常に残念に思い、育英事業の復活について検討を進めておりましたが実現を見ずに昭和33年11月逝去しました。

山口順太郎翁(当主の父、誠太郎翁の長男)は厳父の遺志を実現するため尽力し、初代理事長 山口順太郎翁部省(現文部科学省)から許可を得て財団法人山口育英奨学会を設立、初代理事長に就任しました。順太郎翁はその運営に尽瘁し数回にわたり多額の資金を寄付し、また邸内に事務所を建設して寄付しました。

さらに郷土の歴史教育・社会資料保存のため昭和50年「郷土資料館」を建設しました。

順太郎翁は平成16年2月に逝去し、2代目理事長に山口敬太郎氏が就任しました。その後、平成24年4月1日に、公益財団法人の認定をうけ「育英奨学事業」「学術研究助成事業」「郷土資料館運営事業」を柱として公益事業の拡充をめざしております。

引用、終わり

(2) 山田又七の教育関係トピックス

宝田石油の社長の山田又七は、海外視察後、商業会議所内に、商工徒弟夜学校を設立した。明治末より高等工業誘致に努め、誘致に関与した令終会の主要メンバーであった。

また小国山口家は、大正後期の、長岡に本拠を置いた宝田石油と日本石油大合同の前から、日本の石油精製事業をリードしてきた事業一族でもあり、大正後期の長岡高等工業誘致に際しても、大きな貢献をしたに違いない。

また、長岡は、県下で最初の県立工業高校であった村松の学校を明治末に市内に移設し、

工業高校教育の基礎を築いている。新潟市の県立工業高校創立は昭和14年である。大正期に創立の長岡高等工業が新潟大学工学部へ引き継がれ、そして長岡工業高校の存在が、戦後の東山丘陵の長岡高専、長岡西部丘陵への長岡技術科学大学の誘致につながっていると考ええる。まさに、オイルシテイの力が、工業生産、商業繁栄のみならず、工学教育・研究の面でも、大きな恩恵を長岡にもたらしてきたといえると思う。

補足 参考までに、新津油田の中野貫一の教育支援について、触れておきます。

なお、1918(大正7)年に100万円の資金で中野財団を設立し、教育や社会福祉事業を始めました。旧金津小学校講堂は中野貫一が寄付した金津尋常小学校の施設です。このほかに近隣の小学校にも寄付を行っていました。

山口権三郎、山田又七、中野貫一 いずれも、教育機関設立や奨学金制度設立に関与したことは、偶然ではないと思う。

新潟の石油産業の空気か、時代か。

(3) 山口権三郎の新ビジネスへの想い（石油事業）

石油採掘、及び石油関連事業への傾倒 ～ 川上から川下まで

川上から川下まで

一般製造業

川上産業(素材産業) upstream industry (basic materials industry)

川中産業(部品産業) midstream industry (parts industry)

川下産業(完成品産業) downstream industry (finished product industry)

石油関連業

川上産業(石油掘削) oil drilling

川中産業(石油精製) oil refinery

川下産業(石油輸送・製品販売) Transportation and products sell

帰国後、なぜ、鋼条採掘機の導入、実業学校設立、そして、タンカー、石油輸送貨車、荷役機械、ディーゼルエンジンと、次々に石油関連事業を推進する機械を自社製造していったか。

この答えが、欧米視察の中にあったようだ。

新潟鐵工所を、その突破口にしたのである。

1886年(明治19年)、石油産業の重要性に着目し、日本石油会社を設立。

1889-1890年(明治22年)、欧米視察

皇国を守らん船を外国に、つくらしむるぞ辛くもあるかな

すめぐにを 守らん船を とつくにに、と読みたい

(英国造船所で日本発注の船舶視察時)

国のためおのがためとて国々を、見ればなすべきことのおほかる

(フランス、ドイツ・ベルリンなど視察時)

～国を思う心、愛国心と、高橋実氏は述べている 長岡郷土史視察時Vol55(2018)

これこそが、石油採掘、及び石油関連事業への傾倒の理由であろう。

1892年(明治25年)、青年たちに実業の知識・技術を学ばせようと長岡に実業学校を創設。

1895年(明治28年)に日本石油附属新潟鐵工所開設。

日本石油(現・JXエネルギー)の関連事業部門として、新潟県新潟市で石油事業関連の機械製造を開始した。

1896年(明治29年)、小千谷金融会社・長岡銀行を設立。(現:北越銀行)

1898年(明治31年)、信越線、直江津・新潟間の開通に尽力(現:北越鉄道会社)

1902 (明治35)年には長岡分工場

1907年(明治40年)、または1908年、日本で最初の建造タンカー。

但し、船体は鋼鉄製(94総トン)だが推進方式はスクーナー型の帆船。

機械動力付きのものとしては初の日本製の鋼鉄製タンカーとしては、

1908年に日立造船の前身である大阪鉄工所で建造されたもので、

総トン数531トン、タンク容量は400トンである

1910年に分離・独立して正式発足。初代社長には日本石油創始者の長男・山口達太郎が就任。

1917年に本社を東京都に移転した。

1919年(大正8年)には国内で初となる産業用ディーゼルエンジンを開発。

日本で建造されたタンカーとしては、1907年(明治40年)または1908年に新潟鐵工所が国油共同販売所(日本石油と宝田石油が共同設立)向けに建造した「宝国丸」(94総トン)があるが、船体は鋼鉄製でも推進方式はスクーナー型の帆船であった。

したがって、下記の船が、機械動力付きのものとしては初の日本製の鋼鉄製タンカーということになる。

虎丸(とらまる)は、スタンダード石油の発注により日本で建造された最初の機械動力付き鋼鉄製石油タンカーである。

1908年に日立造船の前身である大阪鉄工所で建造された。

総トン数531トン、タンク容量は400トンである

(4) 新潟鐵工所の設立趣意書

本文作成後、「みなとまち新潟の社会史」(新潟日報事業社2018)を読みまして、そこに新潟鐵工所の設立趣意書(日本石油の附属工場設立)の一節がありました。

1889-1890年(明治22年)、欧米視察の折りの、下記の歌の実現が、ここにあった、と感じました。

皇国を守らん船を外国に、つくらしむるぞ辛くもあるかな

すめぐにを 守らん船を とつくにに、と読みたい

(英国造船所で日本発注の船舶視察時)

国のためおのがためとて国々を、見ればなすべきことのおほかる

(フランス、ドイツ・ベルリンなど視察時)

以下に、その本から概略を転記させていただきます。(p214)

「新潟」の名を冠し、全国的な総合重機の中堅メーカーとして発展した代表企業に「株式会社新潟鐵工所」があった。社史『新潟鐵工所100年史』から同社の創業時を振り返り、新潟港との関連を探る。

同社は1894(明治27)年8月5日に日本石油の付帯事業として設立された。この日、日本石油の臨時株主総会が本社(当時の新潟県三島郡尼瀬)で開催され、同社の創始

山口権三郎と内藤久寛社長が連名で、鉄工所を本社付帯事業として創設する案を提議し、満場一致で可決された。設立趣旨については、内藤社長の自著『春風秋雨録』に次のように記されている。

「削井製油に要する機械器具類を一々外国に仰ぐようでは到底事業の発展を期する訳にはいかぬから、これが専門の鉄工所を起こして内地石油の需要に応じ 兼ねて造船業も営みて日本海方面の斯業に貢献せん」。

会社創設当時の交通事情は今日とは比較にならないほど悪く、鉄道は東京から直江津までは通じていたものの、主な油日がある尼瀬・西山(柏崎周辺)、東山(長岡・三条周辺)・新津には敷設されてなかったのである。これらの各地から直江津まぶのは船便に頼らざるを得ず、そのうえ、日本海沿岸に機械類の製作所がないため、内藤らは、鉄工所を設置により、石油削井機械などに必要な機械器具の製作修繕、ども行い、日本海方面における殖産興業に資することを考えた。

まさに、海外見分旅行の時の歌、そのものの具体化であった。

その後、1917年に東京に本社を移し、2001年に会社更生法申請まで、プラント部門とディーゼルエンジンの一部を除き、生産拠点の中心を新潟に置き続けた。

みなとまち新潟の社会史(新潟日報事業社2018)

3. 山田又七 の生涯

山田 又七(やまだ またしち、安政2年8月15日(1855年9月25日) - 大正6年(1917年)12月31日)は、明治・大正時代の起業家・実業家・政治家。宝田石油の創業者。新潟県出身。新潟大学工学部の前身となった長岡高等工業学校の設立を要請しつづけた。

・長岡の宝田石油と山田又七

越後国三島郡荒巻村(新潟県長岡市)の農家に生まれる。1862年(文久2年)、家に入った強盗に右手の親指・人差し指を切りつけられ、指先が曲がってしまったため、農家をあきらめ商人を目指す。1865年(慶応元年)、長岡町の小間物商・竹屋(加藤竹吉商店)に奉公するようになり、後にその養子となるが、1879年(明治12年)に養家を離れ、古志郡浦瀬村で水力による綿糸の紡績工場を営む。

1887年(明治20年)、長岡の東部に連なる東山連峰に石油が出る事を伝え聞いていた又七は、新町の精油業者と共に浦瀬村を訪れ露出する石油が良質である事を確認し、その事業化に乗り出した。1890年(明治23年)、同時期に東山油田に目をつけ試掘を行っていた小坂松五郎が、資本の有利から一足先に事業化を果たしたものの、又七も殖栗順平らと山本油坑会社を興した。その直後に長岡石油会社、さらに1891年(明治24年)に高津谷石油会社、地獄谷石油会社、1892年(明治25年)には小坂松五郎らと長岡鉄管株式会社を設立した。

そして、松田周平から譲り受けた古志郡荷頃村比礼の鉱区を基に、1893年(明治26年)2月に宝田石油株式会社を創設。本社を長岡に置き、又七は社長に就任した。1896年(明治29年)には古志石油と合併し、古志宝田石油株式会社と社名を変更したが、1899年(明治32年)には宝田石油株式会社に復した。また、1898年(明治31年)には製油所を買収して、製油事業にも進出した。

明治30年代初めの石油鉱業界は、投機的な零細企業が乱立する一方、アメリカのスタンダード石油などの外資系企業が影響力を拡大していた。そのため、1901年(明治34年)、遊説のために長岡を訪れた大隈重信は、石油業者たちを前に石油会社の合同を提唱した。この提唱に応じて又七は、中小の石油会社を合併・買収し、1908年(明治41年)までの7年間に4次にわたる大合同を断行した。これによって宝田石油は、日本石油と並ぶ大石油会社に成長した。その一方で、無理がたたって会社の経営は悪化し、役員 frequent 交替による紛争、不祥事が絶えなかった。

この間、又七は1906年(明治39年)には新潟県会議員、1908年(明治41年)からは衆議院議員となり、1911年(明治44年)に緑綬褒章を授与されたが、会社内での実権を徐々に失い、1915年(大正4年)に社長の座を橋本圭三郎に譲った。なお、1921年(大正10年)、橋本らによって宝田石油は日本石油と合併している。一線を退いた又七は、田村文四郎らと令終会を設立し、悠久山公園の整備に着手したが、その完成を見ずに急死した。

長男・山田又司は慶應義塾大学を卒業後、銅山経営に従事し、1924年(大正13年)から衆議院議員を5期務めた。
養子・山田多計治は大阪機械製作所(現・オーエム製作所)を設立し、その社長となった。

4. 山田又七 補足

(1) 山田又七、田村文四郎と令終会

<https://www.nagaokacci.or.jp/file/pdf/about/guidebook/8p.pdf>

大正 5年(1916)、牧野家による長岡開府300年の記念すべき年を翌年に控えた中で、山田又七、田村文四郎ら当時の60歳を超えた人々が相集い「令終会」を結成しました。「令終」とは「人生の終わりを全うする」の意味で、彼らは「我々はやがて死を迎えるであろうが、生れ育った長岡の次なる世代のために、何か役立つものを残そうではないか」と考えました。そこで計画して建設され、やがて長岡市に寄贈されたのが、当時荒れていたしていた悠久山を整備し、自然豊かな美しい公園にし、長岡市に寄付したのです。

令終会は募金趣意書に「人生の終わりを全うせしむるに自己の私財を善用し、末を誤ることなかれ」と訴え、当時のお金で10万円の寄付を集めました。現在のお金に換算すれば数十億円、その金額は令終会の発案がいかにより多くの市民の共感を呼び賛同を得たかを物語っています。

平成8年に開園した「雪国植物園」も令終会思想に影響を受け、啓発されたことによりその設立構想が提起されました。そして、その思想に敬意を払いつつ、雪国植物園の造成維持運営組織の名称は「社団法人 平成令終会」と命名されました。現在は、県内外から多くの人々が里山散策に訪れています。信濃川をはさんで東5キロの地点に悠久山公園があり、西5キロの地点に雪国植物園があります。市民参加型で誕生した両施設が東西等距離に立地していることは不思議な一致ですが、それを可能としたのは、令終会思想をはじめとした先人たちの尊い理念が多くの人々の心の中に宿り、共感を与え続けているからとも言え、長岡が誇るべき資産だと思います。

補足 田村文吉 北越製紙創業者・田村文四郎の三男)

田村文吉の悠久山学園都市構想・・・父の令終会への思いを継いだように感じる。大正の初期 大正 5年(1916)、令終会(60歳以上の篤志家)が荒廃した悠久山を整備し、長岡市に寄付。

田村 文吉(たむら ぶんきち、1886年9月22日 - 1963年6月26日)は、新潟県長岡市の紙問屋・田村文四郎の三男として生まれる。日本の政治家、実業家。大正 5年(1916)は、文吉30才。参議院議員(1期)、第8代長岡市長。長岡市名誉市民。新潟県立長岡中学校を経て、1911年に東京高等商業学校(一橋大学の前身)専攻科を卒業、越後鉄道に入社し、経理課長として実務経験を積む。1915年、父たちが設立した北越製紙(現・北越紀州製紙)に支配人として入社し、1934年に専務、1940年には社長に就任。工場の新設・拡充をリードし、北越製紙を現在の規模に育て上げた。また、1928年には長岡工業会を設立して産学官連携を推進し、1944年には新潟県商工経済会の会頭に就任した。1945年8月1日の長岡空襲で市長・鶴田義隆が殉職すると、その後任に推されて9月に第8代長岡市長に就任、長岡市の戦災復興に精力的に取り組んだ。1947年、参議院議員となって緑風会に所属。第3次吉田内閣第1次改造内閣では、郵政大臣兼電気通信大臣を務めた。また財団法人積雪研究会の会長となって、長岡市内に積雪科学館を作り、長岡市科学博物館の建設にも支援を惜しまなかった。1962年には藍綬褒章、旭日重光章を受章。その翌年に死去、享年76。死後、長岡市葬が営まれ、長岡市の名誉市民となった。

(2) 山田又七小伝メモ

「山田又七小伝」内山弘さん著 (2007)に関連してガイド・ポイント作成 春日ページ

- 18-31 丁稚奉公先の養子となったが離縁。その後、製糸業を営むも撤退。
 ～ 事業の失敗と先進地区の見聞から、ビジネス経験を積んだ。
 M23石油に進出。 M25比礼に優良鉱区獲得、宝田石油創業。
 36 比礼から長岡まで3インチ鉄管、国内で初のパイプライン。(M29)
 37 反町栄一さん 東山油田を語る (S17)。
 ～明治中期から大正初期の、神田から呉服町、中島の様子。
 50 西山進出 (M29)
 52 五十六少年、長岡中学時代に実兄の勤務する石油会社を見学、
 初めての石油に関する認識。(M31)
 54 二つの又七像 M32田中後治(のちじ)作で現存、T9武石弘三郎
 の作 (又七没後)は戦時供出。
 又七の子息、又司、多計治(養子)
 59 長岡製油所のあった場所は、旧中島兵学所跡、今の表町小学校
 裏の通りを北方向に安鉄橋、宝田橋の先までの一帯。
 62 長岡商人は自前で製油所建設。品質向上と長岡の石油躍進(M33)。
 63 オイルシティの名 (M37) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/802792/207>
 73 日本石油とともに、日本の二大石油会社となる。(中小買収M35-M43)
 97 ライプ会との関わり。 ～ランプ会は日石を支援。
 98 山口権三郎が綱掘機導入 (M23)。 ～あの世界一周旅行の直後。
 98 山口が新潟・山ノ下に新潟鉄工所設立 M28 機械製造、保守に
 本格進出。その後も柏崎、長岡に分工場を設立。
 100 長岡の鉄工所数社が長岡鉄工組合を設立(M39,1906))、後に長岡
 鉄工所。S11 大阪機械を基盤とする会社に合併され、消滅。
 103 日本石油、ロータリー削井機で掘削の生産性向上。(M45)
 宝田石油も導入。長岡鉄工所組合がこの機械を模造し、宝田
 石油が新津油田を開拓。西山、東山、新津、小千谷の各油田に
 '合計で十数台配置。
 106 宝田石油を退任。T5
 110 東山油田の石油産出ピークは M35-43あたりで、国内の40%強。
 一線を退いた又七はT5、田村文四郎らと令終会を設立、悠久山公園
 の整備に着手。その完成を見ずに T6 急死。宝田石油は、大正十年に
 日本石油に吸収合併された。
- 日石の企業ロゴの「赤い蝙蝠」のオリジナル二点のうちの一点は、
 小国・山口財団の施設・敬山閣内に掲示されている。

オイルシティ長岡の、その後の関連する事業会社の推移

・オイルシティ長岡の、その後の関連する事業会社の推移の一例

日本石油の探査部門は、昭和十六年、国策会社の帝国石油に統合。その帝国石油も現在は国際石油開発帝石になり、その長岡鉱場は来迎寺で国内最大ガス油田を採掘中。

東蔵王で、石油資源開発株式会社(略称JAPEX 日本国内外の石油、天然ガス資源の権益を持ち、開発・生産・輸送・販売を行う会社)が、事業を展開中。

下々条で、世界最大の油田検層事業、油田サービスの多国籍企業シェルンベルジュが、油田・ガス田オペレーション事業を展開中。

新潟織工所は長岡・城岡で工作機、石油荷役機事業、新潟・山ノ下で造船とディーゼルエンジン、東京で石油精製プラント設計建設事業などを展開した。90年代初めの経営破綻の後、主要事業は他社に譲渡されて個々に継続している。(県内では新潟、長岡、加茂)その他、戦前から多くの工作機械会社が北長岡を中心に創業、現在も事業を継続している。

石油開発会社である「INPEX」

INPEXは1941年に半官半民の国策会社として設立された帝国石油と、1966年に設立された国際石油開発が2006年に合併し設立され、2021年の社名変更で現在のINPEXとなりました。現在も日本政府が筆頭株主となっています。

JAPEX(石油資源開発)

MySkip Vo 1169 (2015)

内山弘さん 郷土史ノートから其の③「山田又七の像」

武石弘三郎製作の胸像は、宝田公園の南側にあったと記されている。戦前の弘三郎の作の、東京・湯島聖堂にあった「長谷川泰」像や、長岡・悠久山にあった「星野嘉保子」像と同じく、大きな全身像であったことが写真からわかる。弘三郎の多くの像とともに戦時金属供出令で消滅しており、残念です。

郷土史ノートから 其の③ 山田又七の像



図① 山田又七全身像（『偉人の像』より）大正9年



図② 子どもに囲まれた又七像（『留影鏡』より）

宝田石油社長山田又七の像は二つ作られた。山田又七は和島村（現長岡市荒巻）の出身で、商店の丁稚、水車による綿紡績会社経営などをした後、浦瀬で石油が産出する予見のもとに、大変な苦勞の末二三の石油会社を立ち上げた。明治26年（1893）設立の「宝田石油会社」が大成功し、その後有力な協力者渡辺藤吉の援助もあって、数々の群小石油会社を吸収合併して、明治末期には日本石油会社と並びわが国二大石油会社に成長した。

図①は明治32年（1899）11月田中後次制作の又七胸像である。戦前長町の山田邸の庭にあったが、現在は又七の子孫が住む川崎町の山田家に保管されている。

田中後次は長岡出身の彫刻家で、山本五十六とはいとこにあたる。東京美術学校助教時代作品であり、又七の若き日の面影を伝えている。戦時中の供出および戦災を免れ、現存していることを喜びたい。



内山 弘 Hiroshi Uchiyama
昭和12年（1937）長岡市生まれ。長岡歯車資料館館長、長岡郷土史研究会顧問、新潟産業考古学会幹事。「山田又七小伝」「戊辰戦争とガトリング砲」他、著書がある。

大正5年（1916）山田又七は宝田石油の社長を辞した。間もなく北越製紙社長田村文四郎と相談して「令終会」を設立した。60歳以上の功なつた会員達の協力のもと、悠久山公園設置事業を始めた。



図③ 山田又七胸像
明治32年

残念なことに、又七は公園完成を見ることなく、大正6年（1917）12月31日帰らぬ人となった。又七の死後、大正9年（1920）4月27日宝田石油本社（現アオーレの場所）の公園に又七全身像が建立された（図①）。しかしこの像は戦時供出でれて今はない。そして図③に示すように人に囲まれた写真はあるが、又七単独の写真はこれまで探し当てることができなかった。

幸いなことに、昨平成26年の秋に知人から又七単独像の存在が知らされた。それが図④である。原像の作者武石弘三郎は中之島村長呂の生れで、東京美術学校卒業後ベルギーのブラッセルアカデミーボザールを卒業した。長谷川泰、大倉喜八郎、森鷗外あるいは長岡女子校創立の星野嘉保子など、多くの著名人の像を制作したわが国の代表的彫刻家である。

又七の和服の全身像は本社のある西方を向いて建てられていた。図①の像と違って、又七晩年の面影を伝えている。



図④ 宝田公園の又七像の位置（戦前の版之上小学校区住宅図より）

5. 新津油田の中野貫一

中野貫一(なかのかんいち、1846 - 1928)

日本の石油王。長男は数寄者の中野忠太郎。

中野家は新潟県の新津油田を中心に発展した。

新道の建設、新田開発、奨学金制度の設立。

最盛期、新津油田の産油量は全国の産油量の3割から4割を占めたという。

新津油田では、出雲崎の西山油田から日本石油(山口権三郎)、

長岡の東山油田から宝田石油(山田又七)が進出し、

中野貫一の中野合資会社の大手3社が油田開発を競った。

新津の石油は、工業港湾都市として発展した新潟を後押しした。

そして石油輸送拠点として、新津を鉄道の町に育てた。

中野合資会社は、1920(大正9)年に日本石油に買収され、残った会社の中野興業も

その後、1942(昭和17)年帝国石油に合併されました。

山口権三郎(1838 - 1902)

中野貫一(1846 - 1928)

山田又七 (1855 - 1917)

石油王中野貫一の野望_大人の休日倶楽部22022Sep

なお、1918(大正7)年に100万円の資金で中野財団を設立し、教育や社会福祉事業を始めました。旧金津小学校講堂は中野貫一が寄付した金津尋常小学校の施設です。

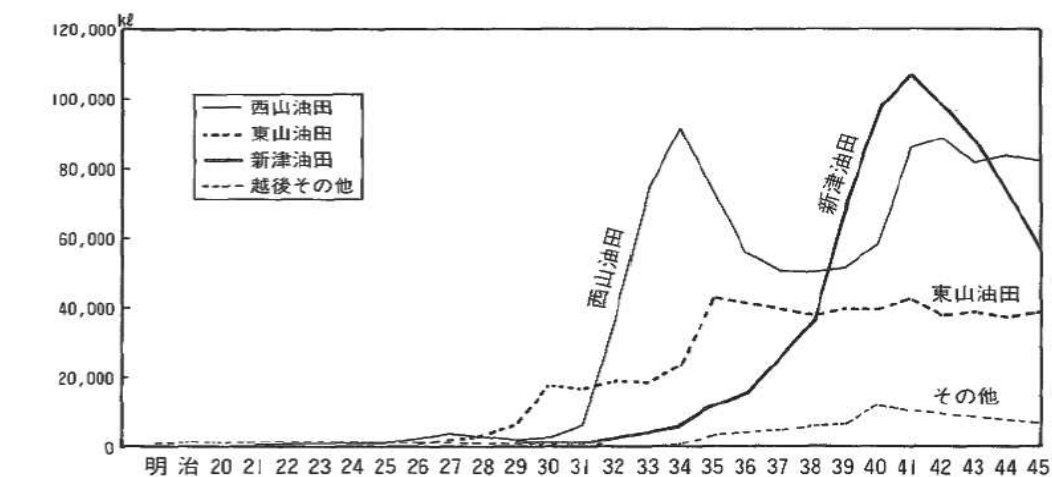
このほかに近隣の小学校にも寄付を行っていました。

山口権三郎、山田又七、中野貫一 いずれも、教育機関設立や奨学金制度設立に関与したことは、偶然ではないと思う。

新潟の石油産業の空気か、時代か。

6. 新潟の明治期の産油量について

図 14 新潟県の油田別原油年生産量



*財団法人 石油開発情報センター 理事長

石油の開発と備蓄 '97・2

— 72 —

石油技術協会誌 (H26) より転載

大正期の車両、艦船(石炭が主流)の時期での、国内生産量のうち、新潟の生産は、国内消費量7%をまかなう程度です。

昭和14年度の日本の産油量で……

42万1270キロリットル程度(台湾を含む) = 264万バーレル/年

これが、世界比率で0.1%程度の産油量です。

昭和14年度の国内の消費量で401万6340キロリットル。

昭和17年度:655万2390キロリットル

昭和18年度:1000万2690キロリットル = 6000万バーレル=0.6億バーレル
(2014年 455万バーレル/日=16.6億バーレル/年で28倍。)

昭和19年度:816万5136キロリットル

(海上交通網の遮断と艦艇の減少の影響が含まれます)

現在

石油生産量は、ここ数年で最多だった2007年で97万9,000キロリットル。

～昭和14年度の日本の産油量の約2倍。

国内消費量全体に占める比率は0.4%に過ぎない。

石油製油所 能力

ENEOS 根岸製油所 15.3万バーレル/dayの能力

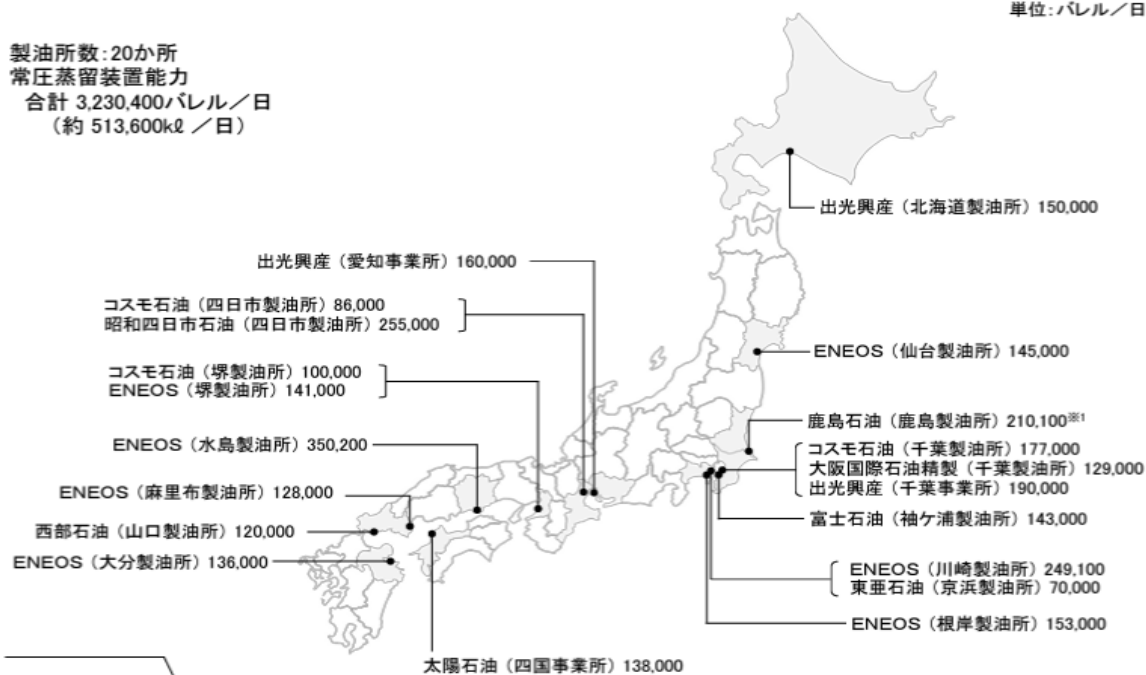
日本全体 300万バーレル/day = 万kl/day

1バーレルは約158.9L(リットル)

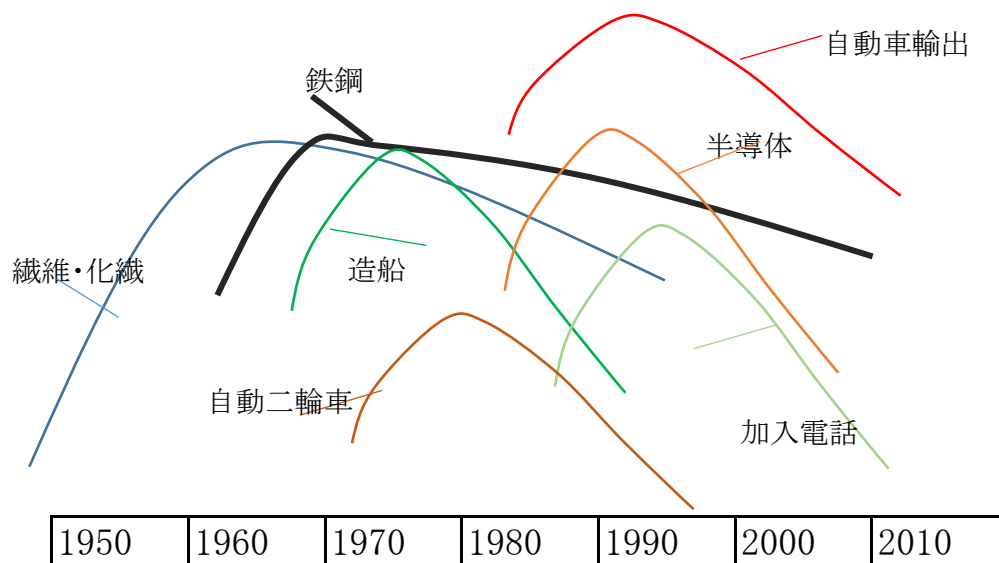
製油所の所在地と原油処理能力（2023年10月末現在）

単位：バレル／日

製油所数：20か所
常圧蒸留装置能力
合計 3,230,400バレル／日
(約 513,600kl／日)



日本の近年の産業盛衰



多くの産業が、20世紀のうちにピークを迎えた。

3. Foundings of businesses and their falls

In 1868, severe Japanese civil war had occurred nationwide, Nagaoka region had been also evolved into the war,. The castle town had been defeated throughout about 80 percent on the urban area, however the city had reconstructed relatively earlier than other cities defeated in that time. One of the reason must be oil industry born in Nagaoka several decades later.

The following is a story of two industrial entrepreneurs actively participated in oil industry in Niigata. Driving forces to realize the oil industry in Nagaoka, may be, their aspiration to help Japan, emerging country taking off to the modern nation.

(1) When Yamaguchi Gonzaburou was 48 years old, he started oil-digging business in Niigata coast in 1886 with traditional boring technology using bamboo, easily available material.

He wanted to learn advanced boring technology spreading explosively in the U.S. Then he went on a tour of Europe and the United States for more than a year after he entered the old age, which was rare at that time.

Immediately after returning to Japan, he ordered the new type of machical drilling machines, and expanded his business.

He made efforts not only to acceleratethe oil industrial development but also to establish banking business, railroad business, and retated industries.

We donated the establishment of an elementary school and supported education for the needy. He had once established industrial school, however the school had closed after a few years because of being premature.

(2) When Yamada Matashichi was 35 years old, he started oil-digging business in Tochio, Nagaoka in 1890.

He constructed the first pipeline in Japan to send oil to refineries

While making a great contribution to Nagaoka's oil industry, he made efforts to accelerate industrial development and invite higher industrial school, later becoming the Faculty of Engineering, Niigata University.

In earlie days, he also acted as a central figure in the establishment of a technical school in the the Chamber of commerce and industries of

Nagaoka

Two companies they established were merged into one company and the new company becomes one of the leading big business in Japan.

In 1945, Nagaoka had been destroyed again overwhelmingly in the end of World War II, however the city had reconstructed again, like a phoenix. This comeback may be largely due to the power of the machinery industry left by the oil industry.

Over the next few decades, several industrial changes took place. For the heavy machinery industry such as oil and shipbuilding, in particular, the difficult times has been continued.

Fortunately, the industries in Nagaoka continue their business until now. This achievement may be largely due to the contribution and inheritance property of the two entrepreneurs described below.

4. Yamaguchi Gonzaburou and Yamada Matashichi

Yamaguchi Gonzaburou and Yamada Matashichi was business entrepreneurs who headed Niigata's industry centered on the oil mining industry in early 20th century. History of the two companies and merged company, established by them are listed below. The merged company has continued his business, now ENEOS Holdings, Inc, survives as a large company representing Japan. Niigata Engineering, unfortunately bankrupted due to insolvency, subsequent companies of the company also survive in various business field.

Time table regarding Yamaguchi Gonzaburou and Yamada Matashichi

Behavior of the two person is very similar, not only having Western countries inspection tour, but also Establishing industrial schools and constructing Iron works factories for their own machine maintenance and repair.

	Yamaguchi_Gonzaburou (1838 – 1902)	Iron-works factory	Yamada Matashichi (1855 – 1917)
1888	Established Nippon Oil		
1889	Western countries inspection tour		
1890	Return from trip, and place an order steel mining machines		Venture into oil industry
1892	Established industrial school in Nagaoka		Established Hoden Oil
1895	Constructed Ironworks factories dedicated to repairs of steel mining machines		
		In-house factory (later, Niigata Engineering)	
1896			Laid pipelines, first in Japan
1903			7-month Western Inspect Tour
1906			Established Industrial school
			Established Iron Works Union, followed machine-tool company
1907		Constructed oil tanker, first in Japan	
1908	Constructed oil tanker, first in Japan		
1910		Founded an independent machine company	
1919		Produced industrial diesel engine, first in Japan	
1921	Nippon Oil merged with Hoden Oil.		
1923			Nagaoka National college of technology
1951	Nippon Petroleum Refining established jointly by Nippon Oil and Caltex.Oil and Caltex.		
1967	Nippon Oil Staging Terminal established. (Kiire, Kagoshima)		
1961–1972		Operated one of the world's largest refineries from design, construction, and operation by one company alone., for Nippon Oil	
1973, 1979	Occurred Oil Shock in all over the world		
2001		Bankrupted due to insolvency	

5. A group of industries remaining, survived the bankruptcy of heavy machinery company (Niigata Engineering)

(1) Brief history

It has grown into a comprehensive machinery manufacturer, focusing on the development of industrial diesel engines, gas turbines, petrochemical plants, and oil refinery plants. He had main factories in Niigata prefecture, where he operated shipbuilding, railroad vehicles, and various industrial machinery, cooperating with several affiliated companies.

However, the performance of the overseas engineering department deteriorated sharply in 90s decade, and the shortage of funds became serious.

Niigata Engineering aimed to improve our financial position, however, in addition to the delay of improvement, orders decreased significantly due to the effects of the terrorist attacks in the U.S. Finally in 2001 autumn, the company abandoned self-reconstruction and bankrupted due to insolvency.

After that, each business of Niigata Engineering had been transferred to other companies, however it retained its technological superiority. And many of them are still continuing their business, examples are shown as Table 6.

(Note)

From the end of the 20th century to the beginning of this century, many heavy machinery companies had disappeared in Japan.

Most of the sales of heavy machinery companies that played a part in Japan's high economic growth were heavy machinery related to various machines and control systems used in petroleum and chemical plants, steelworks, and large shipbuilding including oil tankers.

After the oil shock occurred in early 70s, the capital investments of these businesses had collapsed and had entered the winter era for a long time.

These heavy machinery companies, which have relied on exports along with domestic demand, are facing fierce price competition and market volatility among the global recession. They gradually lost their corporate strength.

Niigata Engineering also went bankrupt as the decreasing constructions of the oil refineries, which were the most profitable area for him, for several decades.

(2) Successor companies

Table 6. Successor companies of Niigata Engineering

Business field	subsequent companies
Plant engineering	Hitachi Zosen Corporation IHI plant engineering
Shipbuilding	Mitsui E&S Holding (Previously know as, Mitsui Engineering & Shipbuilding)
Transmission converter	Hitachi NICO Transmission
Industrial diesel engines, gas turbines	IHI power systems (Niigata diesel engines)
Diesel train Approximately 80% of the domestic diesel car market share	Niigata Transis
Loading arm, Fluid handling equipment It has the top share of fluid handling and transportation that connects LNG and crude oil from ships to tanks. Almost monopolized in Japan.	Tokyo-Boeki

These companies possess excellent key components that competitors do not have. The superiority of overwhelming differentiation is still maintained. The company had human resources who were excellent at identifying technology, which could be called "excellent technical judgement."

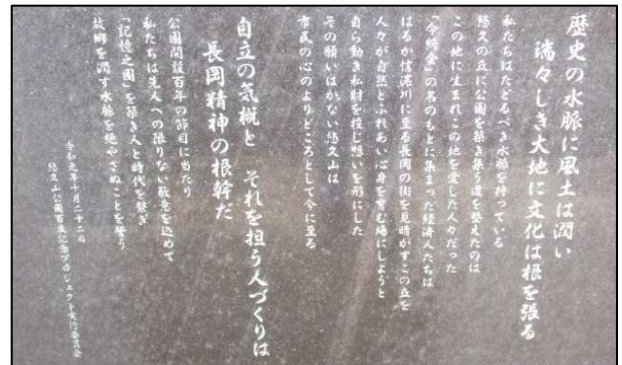
Reference Bronze statue of Yamada Matashichi

Mr. Yamada Matashichi was one of the main members "Reusyu kai", group of commemorative park establishment for the 300th anniversary, from the opening of the Makino feudal domain.

- (1) Bronze statue of Yamada Matashichi, stone monument, and inscription beside the Kensyou-Ji temple in Nagaoka, YuuKyuuzan



Bronze statue of Yamada Matashichi (Left)



Tamura Bunshirou (Right)

Inscription

The climate is moisturized by the water veins of history and our culture takes root in the fresh land
We have a water vein to follow.

It was the people who were born here and loved this place.
They built the park on the eternal hill and prepared the way to gather here.

The business people who gathered under the name of Reishuu-kai tried to make this place a park where people can interact with nature and nurture their minds and bodies.
The hill overlook the city of Nagaoka, the Shinano River flows.

Group members in Reishuu-kai moved voluntarily to gather friends and invested their own money to shape the park.

That wish has come to fruition, and the park remains now as a place of peace of mind for citizens.
This shows the spirit of independence and the cultivation of human resources. And that this is the fundamental of the Nagaoka-ites spirit.

On the 100th anniversary of the park's opening,
we have endless respect for our predecessors and established "Memorial Garden" to connect people and the times we swear to keep the water veins that moisturize my hometown.

Oct. 22nd, 2019

Yukyuzan Park 100th Anniversary Project Executive Committee

参考

顕彰乃碑の全文

歴史の水脈に風土は潤い
瑞々しき大地に文化は根を張る

私たちはたどるべき水脈を持っている
悠久の丘に公園を築き集う道を整えたのは
この地に生まれこの地を愛した人々だった
「令終会」の名のもとに集まった経済人たちは
はるか信濃川に至る長岡の街を見晴るかすこの丘を
人々が自然とふれあい心身を育む場にしようと
自ら動き私財を投じ想いを形にした
その願いはかない悠久山は
市民の心のよりどころとして今に至る

自立の気概と それを担う人づくりは
長岡精神の根幹だ

公園開設百年の節目に当たり
私たちは先人への限りない敬意を込めて
「記憶之園」を築き人と時代を繋ぎ
故郷を潤す水脈を絶やさぬことを誓う

令和元年十月二十二日
悠久山公園百歳記念プロジェクト実行委員会